2017年12月26日　小林

赤字：大草の回答（2018.3.27）

**大草さん論文へのコメント**

以下は、12月16日に大草さんに口頭で伝えた内容です。なお、当日、参考文献コピーもお渡ししています。

⇒赤字は大草からの回答です。

* 論文タイトルは「仏教」全般を対象にしているが、「はじめに」では因果応報と輪廻のみ取り上げることになっている。なぜこの二点に絞り込んだのか説明する必要があるのではないか。「仏教」の基本的な倫理として慈悲の心があり、その他重要なキーワードとして無我、無常、空、縁起、本覚思想、他力本願、罪業などなどがある。
* ⇒上手く説明できないので、倫理に関係する主な論点として、戒律、因果応報、輪廻転生を取り上げることにしたという修正をした。
* 論文は、テーマを決め打ちしたうえで、因果応報で一本、輪廻で一本書くのも手かもしれない。
* ⇒細かくなりすぎるような気がしています。仏教の詳細な説明ではそれがふさわしいと思います。

今回は倫理に影響を及ばしていることが説明できれば簡単でよいと考えております。いずれ、どこかの時点でそういう細分化された論文にもチャレンジしてみたいです。

* 仏教の影響は、プラスとマイナスの両面あると思うが、本稿ではプラス面のみ取り上げているように思われる。両面とも取り上げないとバランスを欠くのではないか。
* ⇒今回はプラス面の記載に限った旨、まとめに追記することにしました。
* 「仏教は、倫理性を含まず」あるいは「仏教には・・・倫理性も含まれている」とは何を意味しているのか、説明が必要ではないか。大山さん、津田さんなど一般人は理解できるのか？

⇒これの説明は難しいので、単純に勧善懲悪てきな記述にしました。

* 11.27付けメールのとおり、私は「仏教は、倫理性を含まず」の意味を2017年5月27日の読書ノートで報告した「仏教における倫理性の欠如」の意味と思っていました。
* 一つはキリスト教との比較で、キリスト教は唯一絶対的な神からの命令として倫理は守らなければならないものとされている、これに対し仏教には倫理遵守を命じるような唯一絶対的な存在が想定されていない。

これはルース・ベネディクトの主張の背景にある考え方で、欧米人は唯一絶対的な神の命令として倫理を厳守するが、日本人には唯一絶対的な神は存在せず恥の文化なので人目がないと不正をおこなう、という主張につながっている。

* もう一つは、仏教の以下の考え方から、現実の世界から逃避し、その一方で現実をあるがまま受け入れてしまうため、現実の世界における倫理に対する関心が希薄化している。

(1)遁世主義：仏教は世俗超越の方法ばかり強調し、世俗内の現実の問題に無関心になりがち。（庵で一人暮らす高僧のイメージ）

(2) 空・一如思想：すべてが空・無実体であり、悟りの世界として一体（一如）であるならば、そこでは善悪の区別ができなくなってしまうのではないかという考え方。（すべてが空なのだから、すべては根本において同一であるということ）

(3)神秘主義：悟りの体験に究極の価値を置くため、その他のことが軽視される。（立証できない事を追求するので、客観性や合理性が無視されるということ）

(4)本覚思想：無常のこの世界は無常のままで永遠の悟りを実現しており、改めて別に悟りを求める必要はない。衆生（煩悩多き一般人）は衆生のままでよく、仏になる必要はないとの考え方。日本文化へ大きな影響を与えた。

私の実感としてもキリスト教系の学校や教会では、慈善活動に積極的（バザー、募金、炊き出しなど）だが、これにたいして仏教系の学校やお寺ではそういう事例をあまり聞かないように思うが。

上記の「仏教における倫理性の欠如」、特にルース・ベネディクトの考え方には以前から批判があり、これに関するこれまでの学者の議論を整理してまとめるだけでもとてもよい論文になると思います。

また、本稿の目的は、「本稿では、第一に仏教に倫理性が含まれており、仏教のどのような倫理が現代日本人の倫理意識に影響を与えているのかを明らかにしたい。」とのことなので、この論点を踏まえて本稿での議論をすすめていく必要があるのではないか。ということで、この論点だけで別論文を書きませんか？とご提案したしだいです。（もちろん、別論文にせず本稿の一つの章として書いてもよいと思いますが。）

⇒今回は、総論的に概要を記述するように修正しました。上記（１）～（４）単語だけで大変分かりにくいのですが、記載しました。これを取り上げるだけで何ページもかかりそうです。別論文で詳細書いてみたいと思います。

* この文章に付いている脚注1は、学者の考え方が紹介されているようだが、具体的な中身が分かりにくい。この内容は、本文でもう少し説明する必要があるのではないか。

「脚注1　島園進「日本仏教の社会倫理」p.247～248。『末木（文美士）の仏教倫理の理解はやや極端なものだが、近代仏教学の原始仏教理解、また浄土教や禅の倫理の理解としてはそれほど変わったものではない。仏教からは世俗社会と積極的に関わるような倫理性は出てこないとするものだ。これに対して、大乗仏教で顕著となる慈悲の理念を仏教の倫理性の基盤にしようとする考え方もあるが、その意識を筋道立てて論ずる仏教学者は少ない。仏教の倫理性についての末木の理解は「超・倫理」というような理解しにくい概念を持ち出してくる新しさはあるが、実は仏教の倫理性を軽んじてきた近代仏教学の伝統に則ったものと言えるだろう。』『サンガは単に修行者のためにあるのではなく、社会に正法を行き渡らせ、平安な生活を導くという社会倫理的意義をもっている。』」

⇒私の体験談で済ませました、、、また、勧善懲悪的な仏教の側面は理解できるのではないかと思います。確かにこの引用文は分かりにくいです。いっそのこと、注）の引用分（根拠となる著作物）は記載しないで、

最後に参照した図書のみ掲示するように修正したいと考えています。

* 「仏教は・・・・ひたすら極楽浄土に導くための救いの宗教と言われることもある。」は、浄土宗・浄土真宗では当てはまるように思うが（確認していませんが）、禅宗やその他の宗派でもこのように言えるのか？
* ⇒全ての宗教には当てはまらないようですので、この記述は削除しました。
* 不殺生戒の対象は、有情と無情＝魂あり・魂なしで線引きされ、植物は対象外ではないか？
* 肉食は小乗仏教では禁止されていない。戒律に明記がないことと、出家僧は托鉢でもらった食べ物に依存して生きているので、もらったものは何でも食べることになっているようです。
* 不殺生戒の背景には輪廻の考え方があるのではないか。ご先祖様は輪廻で虫や犬等々に生まれ変わっている可能性があるので、虫や犬等々を殺すと尊属殺人になりかねない。だから、生命あるものを殺すな、ということになる。（逆に言うと、輪廻の考え方で人間は植物に生まれ変わることは想定されているのか？）
* 不殺生戒は生命尊重の考え方なので、生命倫理や環境倫理に良い影響を与えているのではないか。食品や医薬品関係の企業では、生命倫理や環境倫理は企業倫理の一部として非常に重要だと思う。食品・医薬品の安全性管理に重要。
* ⇒不殺生戒は、私の誤解でした、小林さんご指摘のとおり修正しました。肉食も書けば、かなりの分量になるため誤解を恐れず概要のみの記載としました。舌足らずの感じがしています。
* 不偸盗は、盗まないという不作為だが、何もしない状態を倫理的というのか？　倫理的な行為は、もっと積極的な行為をいうのではないか？　たとえば、ベンサムの功利主義では、他人や社会全体の幸福が増大するような行為で、利他的・自己犠牲的な行為を倫理的というようです。多数決が正当化されるのはこの考え方による。

⇒ご指摘とは観点が違うのですが、補足しておきました。

* 親鸞の妻帯は不邪淫戒に違反したように書いてあるが、親鸞は僧侶として妻帯したはずなので、具足戒の淫戒に違反したのではないのか？　不邪淫戒は在家信者にのみ適用されるのではないか？
* ⇒私の理解不足でした。修正しました。
* 親鸞は考えに考えたすえに信念をもって妻帯したはずなので、「戒律を軽んじ」て妻帯したわけではないと思う（確認していませんが）。やや説明不十分の感あり。
* ⇒親鸞の記載はご指摘の通りです、親鸞の名前そのものも削除しました。簡単に扱えないのがその削除理由です。
* 日本では一般的に戒律は軽んじられてきたのは事実と思うが（親鸞以前にも比叡山の高級僧侶が妾宅を持っているのは普通の事だったようです）、それには歴史的にさまざまなボタンのかけ違いがあったためであり、そのような背景を説明しないと、やや説明不十分の感あり。
* ⇒この背景の説明はなかなか大変です。簡潔に記載でき兼ねるため、パスしております。
* 戒律に関するボタンのかけ違いの一つは、鑑真がはじめて日本にもたらした戒律は小乗仏教の戒律であったことから、日本の実情にあわなかったようです。なお、鑑真は当時の中国で戒律研究の第一人者的僧侶（律師）だったので、日本の朝廷は鑑真を名指しで招聘したようです。
* このため、最澄は大乗戒を作るべきことを提唱し、大乗戒が作られたが、これはかなりバクっとした内容であったようです。これもボタンのかけ違いの一つか。その他いくつかのボタンのかけ違いあり。
* このような背景から、日本では戒律は南都系（奈良）と天台系（比叡山）の二つに分かれ、それぞれ各宗派に引き継がれていったようです。
* 戒律は授戒という行為・儀式があってはじめてその授戒者に適用されるもので、その性格は法律のように上から「何々をするな」「何々をしろ」という命令ではなく、授戒者が「わたしは何々をしないようにします」という個人的・自主的な誓いの性格が強いそうです。だから、戒律違反を非難してはいけない、という考えがあるようです。
* なお、授戒とは、律師（戒律の専門家）が、戒律を受けたいとのぞむ者に戒律の内容・解釈を講義して、それに対して「私は戒律を守ります」と誓う儀式のようです（はっきりしないところはありますが）。
* ⇒ご指摘の通りです。今回は戒律も詳細に触れるとかなりの分量になるため、一般的な表面的な扱いとしています。これも取り上げるとなると別論文になりますね。

以上、2.1.3不邪淫まで。

12月16日にメールにてお送りした6件の論文について

お送りした6件の論文の趣旨について補足しておきます。

6件とも、「因果応報」と「輪廻」をキーワードにしてCiNii論文データベースで検索し、公開されている論文のなかで関係ありそう・面白そうなものをダウンロードしたものです。（ほかにも多数あり。）

1. 「芥川龍之介「蜘蛛の糸」を読む」弘前大学・山本欣司
2. 「岩崎京子「かさこじぞう」のたくらみ」島根県立短期大学・岩田英作
3. 「慈悲と空観－宮沢賢治の「雁の童子」論」上越教育大学・小埜裕二
4. 「宮沢賢治作品における狐－昔話や民話、伝承との関係」東洋大学・高橋直美
5. 「輪廻と諦観：小津安二郎「麦秋」について」大阪大学・上倉庸敬
6. 「グリム童話と「日本の昔ばなし」の比較」三重大学・太田伸広

上記の論文は、「因果応報」と「輪廻」が日本人の倫理へ与えた影響を論じたものではありません。

ただし、以下の点につき気づかされたという意味で参考になりました。

* 昔から語りつがれてきた日本の昔ばなしの中には、「因果応報」と「輪廻」をモチーフにしたものが少なからず存在すること。現代においても有名な小説家・映画監督の作品に「因果応報」と「輪廻」の影響を受けたものが存在すること。
* そのような昔ばなし・作品は、多くの日本人に親しまれており、その結果、日本人は知らず知らずにその影響をうけていることが分かる。（「証拠物件」）
* 日本人の倫理へ与えた影響を論じる場合、「証拠物件」をたんねんに集めて提示することが必要ではないか。

⇒ご指摘は全くその通りと思います。証拠物件を集めることは、論文の説得性を強化するために必要不可欠と思います。検討したいと思います。

以上